

=====
本メールマガジン[NEE Mail Magazine]は、経済教育ネットワークより会員の
皆様にお送りしております。
=====



◆ NEE Mail Magazine 109号 ◆

-----2018-2-2◆◇

二月、如月になりました。

今年、寒波襲来で、一月には東京でも大雪が降りました。二月は入試のシーズン。
寒波の中、そして猖獗をきわめるインフルエンザの中での受験は、受ける生徒だけ
でなく監督や採点に回る側にとっても大変です。とはいえ、春はもうすぐ。
試練をこえて歓喜というのは古今東西の真理でしょう。

今月もネットワークの活動を報告するとともに、授業に役立つ情報を提供いたしま
す。

【 1 】最新活動報告

18年1月の活動やニュースを報告します。

【 2 】イベントカレンダー

部会の案内、関連団体の活動などを紹介します。

【 3 】授業のヒント「暗記のすすめ」

【 1 】最新活動報告

*18年1月に行われた活動を報告します。(開催順)

■先生のための経済教室(沖縄)を開催しました。

日時:2018年1月6日(土) 13時00分~17時00分

場所:沖縄県立博物館・美術館の美術館・講座室

主な内容:44名の参加

(1)まず、大杉昭英先生(教職員支援機構次世代型教育推進センター上席フェロー)
による「次期学習指導要領の下での金融教育」の講演がありました。

指導要領の改訂の背景と何を求めているのか、そこから、どういう学びが求められ
ているのかに焦点をあてた話を、参加者に例題を提示し考えてもらいながら、
中央教育審議会諮問(H26.11)の内容、キーコンピテンシー、PISA型の読解力、
アクティブ・ラーニングの必要性などを解説されました。

(2)次に、河原和之先生(立命館大学非常勤講師他)による「経済から地理を学ぶ
~うそっ!ホント!沖縄ネタからディープラーニングまで~」の講演がありました。
様々な地理と経済の融合教材を紹介されたのちに、多くの沖縄ネタとともに、
「クイズで考える沖縄の産業や生活」を紹介されました。特にクイズの内容は、

地元の先生たちにも驚きのネタだったようでした。最後に、沖縄の未来をテーマにしたジグソー学習に関しても触れられました。

(3)最後に、篠原総一先生(京都学園大学学長)による「経済から歴史を学ぶ～大恐慌から第二次世界大戦まで～」の講演がありました。これは昨年の夏の経済教室に基づくものです。

(4) 今回の沖縄での経済教室には、小中高の先生、社会、地理歴史、公民だけでなく、商業や家庭科の先生方なども参加され、他校種・他教科共に学ぶ機会となりました。また、参加の先生方からは、時間の関係で割愛せざるを得なかった内容も是非聞きたかったとの感想が寄せられていました。

教室の詳細は以下をご覧ください。

[http://www.econ-edu.net/activity/2018%20Seminar/Fuyukeizai\(Okinawa\)2018.pdf](http://www.econ-edu.net/activity/2018%20Seminar/Fuyukeizai(Okinawa)2018.pdf)

■東京部会(No.97)を開催しました。

日時 2018年1月18日(木) 19時00分～21時00分

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究棟 442号会議室

内容の概略:11名参加

(1)大会関係の総括と企画が話し合われました。

12月冬の経済教室の総括に続いて、3月17日に予定されている年次大会の概要と、それへの取り組みが報告されました。また、夏の経済教室の日程が確定して、報告されました(後述)。プログラムに関しては、二月の東京部会までに原案を作成、検討することになりました。

(2)実践報告が3件ありました。

1)杉浦光紀先生(都立秋留台高校)「契約と消費者破産」

高校三年生の必修「現代社会」での実践で、生徒の課題に対応した法教育と経済教育として、司法書士と連携した外部連携の実践の試みの授業です。

授業は三時間構成で、生徒が借金問題で自己破産にならないようにするために法的知識だけでなく行動経済学の知見を取り入れたとのことでした。

杉浦先生からは、生徒の授業による変容や理解に関して詳細な分析があり、反応分析から、思考の広がりや深まりの点で不満が残ったことから、野間敏克先生が昨年の夏の経済教室で発表されている「野間モデル」を使ってこの問題を整理した授業案も提示されました。

検討では、意欲的で意義のある実践だが、授業内容が豊富すぎてさらに整理が必要ではという指摘や、外部講師に依頼する場合、講師によって授業効果に違いがでてくるので、どのような分野の方に依頼すべきか検討すること、他教科特に家庭科との連携を検討するなどの提案がありました。

2) 杉田孝之先生(千葉県立津田沼高校)「野間モデル労働の授業設計」杉田実践は、労働の授業を「野間モデル」を使って行なった報告です。労働の授業は、教材選択の5条件(メルマガ100号、17年5月で紹介)適合したものであることがまず指摘され、そのうえで、生徒には、労働市場の変化のなかで「したい仕事」「できる仕事」「求められる仕事」を高校段階から考えさせたいなど授業のねらいを話され、実践内容の紹介がありました。

検討では、労働市場に関しては労働分配率の低下があり、一方では生産性はじりじり上がっているなかで所得の格差が広がっている現実を踏まえて、授業を進めるとよいという指摘がありました。

3) 塙枝里子先生(都立府中東高校)「公共財を考える」(加藤一誠先生の特別講義)これは、1月10日に実施された高校三年生対象「政治・経済」での、加藤一誠先生(慶応義塾大学)の特別授業「公共財を考えるー多摩川環境整備からー」の報告と生徒の反応が述べられました。

加藤先生の授業は、まず、公共財の定義を公共財の歴史から取り上げ、次に、具体的事例として学校の近くの多摩川の堤防整備をとりあげ、公共財整備のためにどれだけの資金を出すかという問題を考えさせるという流れの授業です。生徒の反応では、やや難しいという声もあったが、加藤先生の提案されたわかりやすい事例(くるくる寿司でいくら食べるか)などの好評であったことがプリントともに紹介されました。

(3) センター試験に代る新テストの試行問題(「現代社会」)の検討が行われました。篠原代表により、試行テストの問題は、形式および内容としてよく練られていて、現在の教科書にもとづくこれまでの授業では対応できないものになっていること、ただし、これだけの問題を作成する作問者には相当の実力が必要であることが問題になろうと指摘されました。また、経済の問題では、良く工夫されているが、エコノミストから見てミスリード(条件や時代を限定しないと全部の選択肢が正解になってしまう設問など)の部分があり、この種の問題を作る場合の難しさが出てしまっているとの指摘もされました。

検討では、いくら工夫されても持続的に高い質の問題ができるのかという疑問や、形式化することによって対策ができてしまうのではないかという意見も出されました。

(4) 鈴木深氏(東京証券取引所)より、東証が企画している「金融リテラシー向上の研修の講師派遣サービス」の案内がありました。

(5) 今回の部会も、実践報告の紹介検討、新テストの分析など、現場の実践とエコノミストの協働による活発な検討と議論がおこなわれ、充実した部会となりました。

内容の詳細は以下をご覧ください。

www.econ-edu.net/meeting/tokyo/tokyo097report.pdf

■先生のための「冬の経済教室」in 札幌を開催しました。

日時:2018年1月27日(土) 13時00分~17時00分

場所:キャリアバンクセミナールーム(Sapporo55ビル)

主な内容:36名参加。

(1)主催者挨拶に次いで、金子幹夫先生(神奈川県立平塚農業高校初声分校)より、「時間軸で考える財政と税の授業~二つの投票授業の実践~」の報告がありました。

これは、昨年の年次大会、および大阪での「夏休みの経済教室」で発表された実践をバージョンアップしたものです。発表を受けて、授業での生徒の活動のしかけに関する評価、その成果や課題に関する質疑が行われました。

(2)吉川敦巳先生から(北海道千歳北陽高校)から、「主権者としての意識や判断力を育む経済学習」の発表がありました。

主権者教育では投票率を上げることだけを目的にするのではなく、政党や候補者を選ぶ基準(ものさし)を身につけさせる必要があるという視点からの発表で、「読売ワークシート通信」を活用した、社会の形成者としての意識を育むために当事者として考え、社会的課題に対して判断力を養うために経済の仕組みや構造を考えて未来の社会の姿を選ばせる各種の実践例が紹介されました。

(3)濱地秀行先生(北海道教育大学札幌校)より「中学校における経済学習と主権者教育の試み」の報告がありました。

濱地先生からは、竹内大輔先生(日高町立日高中学校)による昨年12月の「冬の経済教室 in 東京」での発表内容を主な題材にして、経済学習と主権者教育の結びつきに関する解説が行われました。

濱地先生は、主権者教育を政治と結びつけがちであるが、消費税の学習のように経済でもアプローチを行うことができ、竹内先生の発表はその事例になるだろうと指摘されました。また、主権者教育における経済教育では、「対立」と「合意」、「効率」と「公正」を経済の点からも考えさせることにあり、このためにも「経済的な見方や考え方」に基づいた価値判断が必要になるということが説明されました。

(4)篠原総一先生(京都学園大学)の「経済から学ぶ歴史~大恐慌から第二次世界大戦まで~」の講演が行われました。

この講演の中で、社会のことを学ぶ(あるいは理解する)方法について重要な指摘がありました。社会のこと(や現象)のメカニズムは余りにも複雑であるため、そのすべてを正確に再現したり、現象の発生と収束のメカニズムをそのままの形で追いかけることは不可能。だから、社会の見方・考え方をを用いて、枝葉にあたる部分は思い切って捨象し、社会現象のエッセンスだけに絞って読み解くというアプローチを採らざるをえないという指摘でした。その上で、第一次世界大戦終了から第二に世界大戦に至る歴史的経緯を経済面から読み説いてみるという、一つの歴史の見方を提示されました。具体的には、キーとなる読み方の道具として金本位制、大恐慌、経済

ブロック化、ケインズ政策などを使い、世界はなぜ大戦を繰り返すに至ったのか、そしてその反省から生まれた戦後の国際金融・貿易体制がどのような特徴をもったものになっていったか、という歴史のストーリーを示されました。

なお、質疑応答に代えて、参加者の自己紹介と感想が述べられました。

(5) 今回の教室は、遠方より、道外では秋田、千葉、東京、鎌倉、京都、道内では釧路、北見から先生方や関係者、この春から教壇に立つ予定の大学生が参加されて盛況のうちに終了することができました。また、終了後の懇親会では質疑の時間では十分に展開できなかった論議が活発に行われました。

教室の詳細は以下をご覧ください。

[http://www.econ-edu.net/activity/2018%20Seminar/Fuyukeizai\(Sapporo\)2018.pdf](http://www.econ-edu.net/activity/2018%20Seminar/Fuyukeizai(Sapporo)2018.pdf)

【 2 】イベントカレンダー

* イベント予定です。(開催順)

■ 年次大会(シンポジウム)を開催します。

日時: 2018年3月17日(土) 13時00分~17時00分

場所: 京都学園大学 太秦キャンパス

テーマ「中・高の新学習指導要領を経済教育から解剖する」

第一部で、中学校の新学習指導要領を中心に、福井大学教授橋本康弘先生の基調講演を受けて、エコノミスト(慶応義塾大学教授加藤一誠先生)、教科書編集者(清水書院編集長中沖栄氏)、現場教員(札幌市立東栄中学校教頭兼間昌智先生)からの問題提起が行われます。

第二部では、新しい金融の教え方に関する同志社大学教授鹿野嘉昭先生の講演と、それを受けて現場の二人の教員と鹿野先生が意見交換をするという企画を用意しています。

内容の詳細、参加方法は以下のHPをご覧ください。

<http://www.econ-edu.net/announcement/Sympo/20180317Symposium.pdf>

■ 先生のための夏の経済教室の日程が決まりました

先生のための夏の経済教室の日程と会場は以下の通りです。

8月2日(木) 名古屋中学向け 会場: ウィンクあいち

8月3日(金) 名古屋高校向け 会場: ウィンクあいち

8月6日(月) 大阪高校向け 会場: 国民会館

8月7日(火) 大阪中学向け 会場: 国民会館

8月9日(木) 東京高校向け① 会場: 東証ホール

8月10日(金) 東京高校向け② 会場: 東証ホール

8月16日(木) 東京中学向け① 会場: 東証ホール

8月17日(金) 東京中学向け② 会場: 東証ホール

* 定例部会のお知らせです。(開催順)

■名古屋部会(No.14)開催します

日時:2018年2月24日(土) 15時00分~17時00分

場所:椋山女学園大学 現代マネジメント学部棟

■大阪部会(No.57)を開催します

日時:2018年2月24日(土) 18時00分~20時00分

場所:同志社大学 大阪サテライト(予定)

■東京部会(No.98)を開催します

日時:2018年2月26日(木) 19:00~21:00

場所:慶應義塾大学三田キャンパス研究棟 446 会議室

【 3 】授業のヒント

■読解力をつけるための「暗記」のすすめ

「音読」、「手書き」ときたので次は「暗記」のすすめです。とはいえ、「暗記」は悪役であり、読解力をつけるために、本当に「暗記」をすすめてよいかは正直難しい面もあります。ヒントなので、これをもとに議論がすすむとよいかとも思っています。

実は、筆者は「暗記」が苦手です。それが何より証拠には、例えば、英単語がある程度以上になるとなかなか覚えられませんでした。英文も同じです。

筆者の受験生時代よりちょっと後に『英文基本 700 選』という本があり、それを暗記すれば英語は合格といわれる時代がありました。事実、1980 年代の東大合格者のほとんどがこの本と、同じ著者による『英文解釈教室』という本を利用していたという伝説すらあります。

単語に関しては、その昔、赤尾の英単とよばれている『英語基本単語集』という本があり、その後には、『出る単』(関西では『しけ単』、正式には『試験にでる英単語』)と呼ばれる本もありました。これらを暗記のために使った受験生は多いはずですが、もともと赤尾の英単では、a の次が abandon でちょっとしたブラックユーモアになっていました。

今は、こんな暗記中心の英語学習法は否定されていますが、だからといって英文の読解力が上がったかどうかは難しい評価になります。

暗記に関しては、漢文の教師が、白文をつかって生徒に暗記をさせ、音読のテストをやっていたという例も筆者の現役時代には身近に見ていました。それで漢文の読解力がついたのでかはやはり疑問ですが、それでも、こんなことをやらされたという記憶は残っていることでしょう。

もっと身近な暗記の例は、百人一首。これは現在も健在の暗記ものになります。ほかに、年代の暗記。いまや「いいくに」はなくなっているとのことですが、それでも、年号や地名の暗記を必死にやっている生徒たちは多いはずです。

暗記がなぜ否定されるか。それは、単なる記号として覚えても意味がないからです。例えば、アダム＝スミ⇒国富論⇒見えざる手、と暗記しても単なる記号では、経済の理解に全く理解に結びつきません。大事なのは、文脈の中で覚えること、それが出てきたときに、引っかけりを感じることです。「なんだろうこれは」という疑問がでてくればしめたものです。スミスの三大話をストーリーで語るための準備として暗記させるなら、そこから話が展開できる作業になります。

中学公民分野や「政治・経済」では、さすがに今は少なくなったかもしれませんが、日本国憲法の全文を暗記をさせる先生がいました。これも、効用としては、暗記をしている中で憲法前文が、なんて複雑な文章の構造なんだろうと、「あれ？」と思いながら暗記することがあると、その成立の秘密の謎に接近することになるかもしれません。

その意味では、暗記は批判的精神、クリティカルシンキングと結びつくと、力を発揮するといえるでしょう。それと、暗記をするための集中力、覚えるための工夫など、暗記をめぐる読解力の周辺にある人間の理解をめぐる様々な要素が動員されることが推定されます。このあたりは、認知心理学などでの研究の蓄積がたくさんあるのではと思われます。

さて、経済の読解力をつけるために必要な暗記事項にはどんなものがあるのでしょうか。メルマガ読者の推薦の箇所をお聞きしたいところです。(新井)

【 4 】編集後記(みみずのたはこと)

東京部会で新テストの検討を行いました。篠原代表の指摘するように、これからの教育のスタイルを変えるインパクトを持つものであることは確認できました。それが正とでるか邪とでるか。意図せざる結果ということばが思い浮かびました。

先月号の解答例です。ことしは明治百年、は

It has been a hundred years since The meiji restoration.

ほかにも例はあがると思いますが、これが試験場で書ければまず合格かな。(新井)

=====
登録に心当たりのない方、今後配信を希望されない方は下記会員ページより
お手続き下さい。

<http://www.econ-edu.net/aboutus/contact.html>

=====



編集・発行 : 経済教育ネットワーク

----- (C) Network for Economic Education ◆◇